

書 評 と 紹 介

園部雅久著

『再魔術化する都市の社会学』

——空間概念・公共性・消費主義』

評者：橋本 健二

本書は、長年のキャリアを持つ都市社会学者が、この十数年の研究成果をまとめた都市社会学の専門書である。これに対して評者は、いわば門外漢で、階級・階層論を専門とする社会学者である。しかし、この書評依頼には必然性があるといえないこともない。そのあたりの背景から論じていきたい。

日本で経済格差の拡大が話題になり、「格差社会」が流行語になったのは、2005年のことだった。ここから遡れば、橋木俊詔が『日本の経済格差』を書き、研究者や一部の読書家の間で、格差拡大の事実が知られるようになったのが1998年、また橋木らが専門的な論文で格差拡大の事実を指摘したのは、1990年代半ばのことである。さらに遡るなら、評者を含むSSM調査（社会階層と移動全国調査）研究グループの何人かが、格差の拡大や社会移動の停滞傾向を指摘し始めたのが1990年で、小沢雅子が「所得再分配調査」に示されたジニ係数が減少に転じ、職業間、産業間、企業規模間格差も拡大しはじめていることを指摘したのが1985年である。

最初の指摘から、格差拡大が社会問題として

認知されるようになるまでに、なんと20年を要している。当時はまだ格差拡大の事実が発見されたばかりで、これが社会全体の趨勢なのか、それとも部分的な現象、もしくは一時的な現象なのかを判断する材料がなかったから、認知されなかったのも無理はない。しかし、この20年の間に、フリーターをはじめとする非正規労働者が激増し、貧困層が増大し、また格差の固定化傾向も明らかに進行した。すでに事態は、取り返しのつかないほどに進行してしまったのである。階級・階層論を専攻する者としては、痛恨の思いがする。

格差拡大が社会的に認知されなかった最大の理由は、「一億総中流」という幻想が、あまりにも強く、深く、人々の意識に浸透していたことだろう。しかも当時は、高度成長による生活水準の向上の記憶もまだ新しく、さらにバブル景気もあった。一部の富裕層とその他の人々の間の格差拡大くらいは理解できても、社会全体を覆う格差拡大の巨大な趨勢が始まっていること、ましてや貧困層が拡大していることなど、にわかに信じられなかったのは、ある意味ではやむを得ないことだった。

しかし理由はもうひとつあって、これについては研究者の側に責任がある。それは、格差拡大が生じる社会的背景や原因について、説得力のある仮説がなかったことである。そうである以上、格差拡大の傾向を趨勢的かつ継続的なものだと主張することはできない。当時の研究者の側の限界だった。

今から考えれば、あくまでも後知恵なのだが、この研究者側の問題を解決して、格差拡大は明確な社会的背景のある巨大な趨勢であり、放置すればさらに進行し続けると主張することは可

能なはずだった。というのはすでに1990年前後、このように主張していた人々がいたからである。それは、マニュエル・カステル、サスキア・サッセンらの都市問題研究者たちである。二人はほぼ同様に、次のように主張していた。

製造業が中心だった従来の資本主義社会では、中程度の技能を持ち、安定した雇用のもとで大量生産を担う労働者が人口の多くを占め、このため格差はあまり大きくならなかった。ところが近年では、産業の中心がサービス産業や金融業に移行するとともに、経済のグローバル化が進み、先進諸国には世界経済の中心であるグローバル・シティが形成されるようになった。グローバル・シティでは、職業が高度な技術や判断力を要する高所得の職業と、低賃金の単純労働に二極化するようになる。そして製造業の海外への移転により、中所得の製造業労働者は減少する。こうして経済格差は拡大するのである。今日では、かなり常識的な説明だろう。しかし、当時としては斬新な主張だった。また、先進社会は一般に都市化の進んだ社会なのだから、大都市で格差拡大が進めば、全社会的にも格差拡大が起こるはずである。

日本の都市社会学者たちは早くからこの主張に注目し、1990年代前半には実証研究を始めていた。なかでも、このような大都市のあり方を「分極化する都市」と名付けて、精力的に研究していたのが、本書の著者である。不覚にも格差研究の中心的な担い手であるはずの評者たち階級・階層研究者は、カステルやサッセンの本が日本語で紹介され、また著者ら都市社会学者たちの研究が単行本の形で広く流通するようになるまで、このような研究が存在することを知らなかった。知っていれば、多少は事態が変わっていたかもしれない。この問題は、都市社会学と階級・階層研究の関係に関わるので、最後に立ち返ることにしたい。

さて、本書の構成は次の通りである。

序章 現代都市の空間再編と公共性の危機

第I部 現代大都市の空間論

第1章 脱工業型都市の社会構成と空間の政治

第2章 ポストモダン都市の空間

第3章 都市社会学における空間概念の革新

第II部 空間再編の事例研究

第4章 変貌する公共空間

第5章 ゲートッド・コミュニティの開発

第6章 都市再開発とホームレス問題

終章 現代都市空間における公共性の問題

簡単に問題設定と構成を説明した序章のあと、理論編の第I部と事例研究の第II部が続ぎ、これを受けた終章では、今後の都市において再建されるべき公共性について検討されている。第I部は、ポストモダンをめぐる華麗な諸概念を多用し、とかく難解になりがちな最新の都市理論を平易に解説しながら、著者の理論的立場を明らかにしていく部分で、たいへん勉強になった。その骨子は、評者の理解する限り、次のようなものである。

まず著者は、官庁統計間の簡要な分析から、1980年以降の東京で、職業構造の転換と所得格差の拡大が進行していることを示し、ここから現代大都市の階層構造は、脱工業化の進行とともに、従来のホワイトカラー層—ブルーカラー層という構図から、専門職層—サービス労働者層という構図が中心となり、さらにその下に形成されたアンダークラス層を加えた三層構造へと転換していると指摘する。さらに著者は、米国の都市政治研究を引きながら、専門職層は数の上では少数派で、直接的に権力を行使することはないにもかかわらず、強い政治的影響力をもつと指摘する。その政治志向は、経済的には保守主義で、貧困層の救済ではなく都市のグ

ローバルな地位向上を目指す反面、社会的には進歩主義的で、エスニック文化や多様なライフスタイルに寛容である。これが現代都市の都市政策の基本となる結果、ここから外れるブルーカラー層、アンダークラス、貧困層は監視あるいは排除の対象となる。

脱工業化した都市＝ポストモダン都市は、以前とは異なる社会構造と空間構造をもつようになる。著者は、デヴィッド・ハーヴェイ、エドワード・ソジャ、シャロン・ズーキン、ジョージ・リッツァーらの所説を検討した上で、これを「再魔術化する都市」と定式化する。もともと近代社会は、伝統社会にあった魔術的要素を拭い去る脱魔術化によって成立した。ところがポストモダン都市では、生産から消費へ、生産手段から消費手段へと中心が移行し、人々に財やサービスを消費させる仕掛けや舞台装置＝新しい消費の聖堂が生まれるようになる。こうして都市は、ファンタジーやスペクタクルに特徴づけられるようになり、再魔術化する。これが、ファンタジーシティである。そしてファンタジーシティの支配的な消費者である新しいミドル・クラスは、郊外を拒絶して都心に住むようになる。これが、ジェントリフィケーションである。

次に著者は、日本の都市社会学では軽視されてきた概念であり、そしてハーヴェイやソジャ、そしてアンリ・ルフェーブルらの理論の中心に位置する空間概念の検討に向かう。彼ら、とりわけハーヴェイとルフェーブルにとって、都市空間は資本主義の再生産のために必須のものである。資本主義は都市空間を新たな投資対象とし、資本蓄積を実現するのだが、反面、労働力が再生産されるのも、また資本主義的生産関係が再生産されるのも、都市空間においてである。このように資本主義社会の社会諸関係は都市空間と切り離すことができない。しかしここで著者は、社会関係の中心をあくまで生産関係に求

めるハーヴェイとルフェーブルのマルクス主義的な視点を批判し、多様な権力関係や文化、そして差別や排除といった問題をも視野に入れるべきだと主張する。

3点ほど、コメントを加えたい。3つのコメントはいずれも、理論的立場の違いと関連しており、いくぶん外在的であることを免れないが、著者の主張へのオルタナティブを提示することを目指している。

1点目は、現代都市の階層構造についてである。現代都市が、アンダークラスという新しい要素を含むようになってきているという著者の主張には、評者も賛同する。しかしブルーカラー労働者がサービス労働者に置き換わることを、階層構造の重要な転換だとする主張には賛同できない。そもそもサービス労働者とは、サービスを生産する労働者であり、その意味で階級理論の立場から見れば、物財を生産する製造業のブルーカラー労働者と変わるところはない。この点は、消費手段が都市の中心的要素になるという主張とも関係するが、これについては後述しよう。さらに著者の考える階層構造図式に、経営者＝資本家階級と、自営業者＝旧中間階級が見当たらないのはなぜだろう。これらの人々も、現代都市の依然として重要なアクターであるはずである。ちなみに2010年国勢調査に基づく評者の推計では、東京都には54.6万人の資本家階級と50.6万人の旧中間階級がおり、両者は就業人口の20.1%を占めている。

この問題は、第2の問題につながる。数の上で少数派の専門職層は、直接的に権力を行使することはないにもかかわらず、強い政治的影響力をもつという。それはなぜか。著者はハーマン・ボシュケンの所説に従って、そのライフスタイルや文化が、現代都市の目指すべき目標とみなされるからだという。しかし、そのように

みなす主体は誰か。おそらくそれは、依然として中心的な政治的アクターであり続けている資本家階級と旧中間階級である。この2つの階級は、自らの利益のために専門職層のライフスタイルと文化をもてはやし、専門職層を買収するのである。ちなみに日本の場合、専門職層は決して格差拡大の是正や貧困層の救済に消極的なわけではない。このことは、たとえばSSM調査データによる政治意識の分析からも明らかである。

第3に著者は、リッツァーの所説を援用しながら、現代都市は消費手段が中心的な位置を占めることによってファンタジーシティとなり、再魔術化するという。再魔術化という用語を用いるかはともかく、消費がファンタジー化しているのは事実だろう。しかし、このとき生産手段が重要でないといえるだろうか。テーマパークやショッピングモールは、消費手段のように見えるが、実は生産手段である。それは、サービスを生産する生産手段であり、そこに働く労働者は生産労働者なのである。彼ら・彼女らは、さまざまな生産手段を用いて、単なる建造物をファンタジースケープに変えてみせたり、単なる工業生産物を「ヒルズで買ったブランド品」に変えてみせたりするのである。この意味でポストモダン都市は、依然として生産の空間である。

さて、第2部を構成する3つのケーススタディは、宮下公園のナイキパーク化計画にともなうホームレス排除、世田谷区のゲーテッド・コミュニティ、グローリオ蘆花公園の建設、川崎駅周辺再開発に伴うホームレス排除という、現代の大都市を象徴するような3つの事件をとりあげていて、いずれも興味深い。データ収集や調査は周到に行なわれているが、詳しい内容紹介は省略していいだろう。2点ほど、コメントを加えたい。

著者は日本型のゲーテッド・コミュニティ建

設反対運動の分析から、反対派の要求が、ゲート建設による排除・分断ではなく、もっぱら周辺地域の増水被害と日照問題など安全・環境問題に向けられていたことを明らかにする。そしてその理由は、リスク社会化の結果、防犯インフラ整備の必要性がひろく受け入れられているからではないかという。しかし、別の可能性も考えてみたい。世田谷区は、もともと資本家階級・新中間階級の多い地域である。著者は評者の著書を引用しながら、建設地周辺が世田谷区としては富裕層の多い地域ではなく、マンションの内部と外部に格差があると指摘しているが、それはあくまでも高級住宅地（高級の「下」かもしれないが）内部の格差である。同じようなゲーテッド・コミュニティが、下町地域の工業地帯や木造住宅密集地域に計画された場合はどうだろう。この事例から結論を下すのは尚早であるように思われる。

次に著者は、ホームレス排除を都市の脱魔術化との関係で説明しようとしている。川崎市は、再開発によって工業都市から「音楽のまち」へのイメージチェンジをはかろうとした。この再魔術化の過程で、ホームレスの人々がめざわりな存在として意識されるようになった、というのである。しかし、ホームレスが排除されるのは、現代に限ったことではない。下層労働者は長い間、寄せ場へと排除され不可視化されてきたのであり、ホームレスとなっても寄せ場周辺に閉じ込められてきた。脱魔術化によって生じた新しい現象とは思えない。

批判めいたことばかり書き連ねてきたが、これらはすべて、前置きである。

冒頭に述べたことだが、もともと階級・階層論と都市社会学は、密接に関連する問題を、時にはほぼ同一の問題を扱ってきた。著者が吉見俊哉の所説を引きながら指摘するように、日本の都市社会学が社会集団と生活構造の問題に対

象を限定する傾向があったとしても、この点は基本的には変わらない。ここ何年かの評者の主要な関心のひとつは、これまでほとんど交流らしい交流のなかった両者を架橋し、「格差の空間社会学」ともいうべき研究領域を確立することだった。そして著者を含む何人かの都市社会学者の業績を、とくに注意して読んできた。ここに、その現時点での集大成ともいうべき著書が現れたことを、拍手をもって喜ぶたい。そし

て、これに匹敵する階級・階層論側からの研究を、近いうちに必ず提示させていただきたいと思う。

(園部雅久著『再魔術化する都市の社会学——空間概念・公共性・消費主義』MINERVA社会学叢書46, ミネルヴァ書房, 2014年10月, v + 239 + 15頁, 5,500円 + 税)

(はしもと・けんじ 早稲田大学人間科学学術院教授)

《法政大学大原社会問題研究所叢書》

法政大学大原社会問題研究所／菅 富美枝 編著

成年後見制度の

新たなグランド・デザイン

人びとが保護の対象から自身の権利を行使する主体となるための支援とは何か。ケア、介護、消費、福祉など、さまざまな現場と世界の最新状況から、成年後見制度を再構築する。 5700円

法政大学大原社会問題研究所／原 伸子 編著

福祉国家と家族

一九八〇年代以降に福祉国家が縮減する過程とグローバル化の下で家族政策が主流となっていく文脈を、米・英・独・スウェーデン・日本などの歴史的な事例を通して比較検証する。 4500円

本田宏、堀江孝司 編著

脱原発の比較政治学

チェルノブイリや福島をうけて、世界各国はどのような選択をしているのか。原発事故が投げかける問題を民主主義への挑戦ととらえ、政治学的な視点から応えようとする。 2700円

ウルリッヒ・ベック 著

《叢書・ウニベルシタス1016》

世界内政のニュース

福島の原発事故、ユーロ危機、ウオール街占拠、テロ……。日々起こる世界的な重大事件を読み解き、いまここにある危機から未来の可能性を探る。 川端健嗣 S・メルテンス 訳：2800円

ミリアム・クラックスマン 著

「労働」の社会分析

織工として定収入を得る人から、その家事を代行する人まで、戦間期の英国で女性の働き方は多様化した。理論と実証研究の統合を目指すオーラル・ヒストリー。 木本喜美子 監訳：3400円

法政大学出版局

〒102-0073 東京都千代田区九段北 3-2-3
TEL 03-5214-5540 / FAX 03-5214-5542

http://www.h-up.com/
※表示価格は税別です